



この度の「令和2年7月豪雨」により、犠牲になられた方々のご冥福をお祈りいたします。また、被災された方々に心からお見舞いを申し上げますと共に、一日も早い復興を祈念いたします。

天台宗総本山 比叡山延暦寺

国禱会にて国家の安泰と人々の安寧を祈られる天台座主猊下



発行所
比叡山時報社
〒220-0422 大津市坂本本町4220
郵便番号 520-0116
電話 077-578-0001
振替 00970-2-9732
宗教法人延暦寺事務所
定価 1部110円 年1200円

延暦寺広報

叡山講福聚教会
会報
年度会費(3000円)中
に会報(比叡山時報)
購読料を含む。

令和2年比叡山から
発信する言葉
「一歩」
「一歩」
一々の労を惜しまず



こちらから

ご購読は

8月4日に世界宗教サミット三十三周年比叡山祈りの集いを行った。しかしながら昨今のコロナ禍により規模を例年より大幅に縮小しての開催となった。

7月は全国的に猛烈な雨に見舞われたことにより、九州、東北や岐阜など多くの方がお亡くなりになり、未だ生死も知れず行方不明のままの方もおられる。お亡くなりになられた方々のご冥福をお祈りし、被災された皆様に心よりお見舞いを申し上げます。

今回の災害が「令和2年7月豪雨」として「激甚災害」に指定されたことはこれからの復興に向けての足がかりとなりそう。しかしながら今回の豪雨の被災地域で民間が行うボランティア活動などは、新型コロナウイルスの感染拡大防止の為、被災した地元自治体以外の遠方から現地へ向かい活動することは困難となっている。被災地の一日も早い復旧が望まれるなか自衛隊はいち早く被災地に入り救助・復旧活動を行っている。現在も被災された方々や現地のボランティアと共に復旧、搜索活動に汗を流されていることに敬意を表したい。コロナ禍と、夏本番の暑さのなかの被災地の皆様のご健康と、早期の復興を祈ってやみません。

一方コロナ禍であるが、非常事態宣言が解かれ、社会が再び動き出したことにより、感染者数は連日増え続け、7月31日には一日当たりの全国の感染者数は1580名を数えた。未だコロナウイルスに対する有効なワクチンの実用化は見通しが立たず感染者数は増加を続けている。最近では新型コロナウイルス感染症の「終息」は難しいので、「収束」の文字が使われ出し、「ウィズコロナ」という言葉を耳にするようになった。文字通りコロナと共に生活することであるが、感染拡大防止に細心の注意を払いながら、生活様式全体を見直し、早くも訪れた第2波と、その後につづくであろう第3波に備える必要がある。

全ての人が多かれ少なかれ心に不安を抱えている今が正念場である。今我々が出来ることが心から祈り、手を差し伸べることである。伝教大師の教えに「一隅を照らす」とある。これは今自身が出来得ることを行うことによって世界全体を明るく照らす精神であり、「ポストにベスト」をも意味する。困難な状況の中、困っている人に手を差し出すことこそが「己を忘れて他を利する」である。皆様と共に手を取り合い一刻も早くコロナ禍の収束、そして被災された皆様の安寧と被災地の復興、国家の安泰を祈らずにはおられません。

祈り～手を差し伸べ日本を明るく

緊急提言 コロナ後の社会を考える

怖いのはウイルスに怯える人間

「コロナ禍を機に社会構造に変化を

新型コロナウイルス感染症の拡大により、世界の情勢や生活スタイルは一変し、収束の見通しは未だつかない。今特集では、去る4月2日、インターネット上で「パンデミックを生きる指針」(以下「指針」)を公開した大きな反響を呼んだ、京都大学人文科学研究所の藤原辰史教授に、繰り返されてきた「パンデミックの歴史」の考察を通じて「コロナの今後」をそのよきよきに暮らしていくのかをお聞きする。「已に起こりつつある」「社会的に弱い立場の人々」へのしわ寄せや差別などの社会問題にいち早く警鐘を鳴らした氏の「生きる指針」を紹介することで考えを助したい。

起こりうる事態を冷静に考える
文系研究者だからこそその予見

人間という頭でかち動物は、目の前の輪郭のはっきりした危機よりも、遠くの輪郭のぼやけた希望にすがりたくなる癖がある。だから自分ばかりでウイルスに感染しない、自分はそのことによって死なない、職場や学校は閉鎖しない、あの国の致死率はこの国ではありえない、と多くの人が楽観しがちである。私もまた、その傾向を持つ人間のひとりである。

甚大な危機に接して、ほぼすべての人びとが思考の限界に突き当たる。だから、楽観主義に依りすぎた現実から逃避してしまう。日本は感染者と死亡者が少ない。日本は医療が発達している。子ども若人ばかりにいい。1、2週間が拡大が制圧の境目だ。2週間後が瀬戸際だ。一年もあれば五輪開催は大丈夫。そう思いながらも中には入らないだろう。そう思いながらも不思議に思っている。希望はいつしか根拠のない確信に成り果てる。

想像力と言葉しか道具を持たない文系研究者は、新型コロナウイルスのワクチンも製造できないし、治療も開発できない。そんな職種の人間ができることは限られている。しかし小さくはない。

たとえば、歴史研究者は、発見した史料を自分や出版社や国家にとって都合のよい解釈や大きな希望の物語を著し込む心的傾向を捨てる能力を持つている。そして、虚心坦懐に史料を読む技術を徹底的に叩き込まれてきた。その



1918年米国カザス州の軍施設内に収容されたスペイン風邪患者。Photo: National Museum Health and Medicine, US, NCP001603

人々の認識を変えたパンデミック

歴史を繰り返さぬための指針
新型コロナウイルスが鎮静化すれば危機が去ったと言っている人は、本当に怖いのはウイルスではなく、ウイルスに怯える人間だ。今回のパンデミックは人びとの認識を大きく変えるだろう。人びとの不測の事態に対するリスクへの恐怖の高まり、ビッグデータの保持と処理を背景とした個別生体管理型の権威国家や自国中心主義的なナルシズム国家がモデルとなるかもしれない。

逆に価値が暴落する可能性も考えている。自国中心主義に溺れる国家が国際社会には溢れ出す

藤原辰史氏

京都大学人文科学研究所
准教授



1976年、北海道旭川市生まれ、島根県横田町(現・奥出雲町)出身。専攻は農業史。1999年京都大学総合人間学国際文学科卒、2004年京都大学人間・環境学博士。著書に『給食の歴史』(岩波新書)、2019年『「分解の哲学」』(青土社)、2019年『トランス』(世界史)(中公新書、2017)等多数。

さており、世界の秩序と民主主義国家は本格的な衰退を見せていくのかもしれない。

しかし世界史の住人たちは一度として、危機の反省から、危機を繰り返さないための未来への指針を生み出したことがない。世界史で流された血の染み付いたバトンを握る私たちは、今回こそは、今後使われることになる指針めいたことを探ることはできないだろうか。

第一に、うがい、手洗い、歯磨き、洗顔、換気、入浴、食事、清掃、睡眠という日常習慣を、誰もが誰からも奪ってはならないこと。あたりまえだ、という反応が帰ってきたら、歴史が我々に教えているのはむしろ、戦争やそのための船上および鉄道での移動がもたらしたまへの習慣を困難にしたことである。人間を不衛生な場所に收容・監禁すること、これを困難にできた歴史も、私たちが知っている。仕事があつても、仕事にも困難を伴うこと、共有のゴミ箱やトイレを丁寧に使うこと、部下が実践することを、上司が止め、上司もみずから進んでやること。よく食べ、よく笑ひ、よく寝るという免疫力を高める重要な行為が、これまで仕事よりも重宝されてきたことを反省して見てもよい。

第二に、組織内、家庭内での暴力や理屈的な命令に対し、組織や家庭から離れた異議申し立てをしたたりすること。ささいな自衛しないこと、なにより、自衛させないこと。その受け皿を地方自治体は早急に準備すること。異議申し立ての抑制こそが、かえって新型コロナウイルスによる被害を増大させるだろう。

第三に、戦争にせよ、五輪にせよ、万博にせよ、災害や感染などで簡単に中止や延期ができないイベントに国家が精魂を費やすことは、税金のみならず、時間の大きな損失となること。どのイベントもその基本的な精神に立ち戻り、シンプルに運営に戻ること。とくに、日本のような災害多発国はいつキャンセルしても対応できるように被害を増大させざるをえぬ。

(ふじはらたつ)
1976年、北海道旭川市生まれ、島根県横田町(現・奥出雲町)出身。専攻は農業史。1999年京都大学総合人間学国際文学科卒、2004年京都大学人間・環境学博士。著書に『給食の歴史』(岩波新書)、2019年『「分解の哲学」』(青土社)、2019年『トランス』(世界史)(中公新書、2017)等多数。

どちらも国を違はず、どちらも地球規模で、どちらも巨大な船で人が集団感染して亡くなり、どちらも初期に失敗し、どちらもデマが飛び、どちらも若者が多数死に、どちらも発生当時の状況が似ている。

当時これまであり得ないほどの人の移動があった。第一次世界大戦の真っ只中だったからである。インフルエンザがこよまで世界に広がり、多くの兵士たちが死んでいった理由として、戦争中の衛生状態や栄養状態が考えられた。兵士は、体調不良を感じても衛生的に悪い条件で無理して作業に従事するため、悪化しやすく、感染しやすかったという。銃後は食糧不足に悩んでおり、やはりインフルエンザ・ウイルスの格好の餌食となった。

いま、世界規模で繰り広げられるような戦争がなかったことを希冀することはできない。二十年の人の移動の激しさは当時の比ではない。その最大の現象は昨今のオーストリア・スラムである。かつての兵士はいまのツーリストたちの動き船ではな飛機で動くツーリストたちの動きは、頻度と量が桁違いだ。それが今回の特徴である。

スペイン風邪が現代人に提示する
忘れてはいけない八つの教訓

スハニッシュ・インフルエンザの過去は、現在を生かす私たちに教訓を提示している。クロトロー『史上最悪のインフルエンザ』忘れられた「パンデミック」(西村秀一訳、みすず書房、2004年)を参考にしつつ、まとめてみた。

第一に、感染症の流行は一回では終わらない可能性があること。スハニッシュ・インフルエンザでは「舞い戻り」があり、三回の波があったこと。

第二に、体調が悪いと感じたとき、無理をしたり、無理をせたりすることが、スハニッシュ・インフルエンザの蔓延をより広げ、より病状を悪化させたこと。

第三に、医療従事者に対するケアがおろそかになつてはならない。スハニッシュ・インフルエンザを生かす人たちの多くが、医師や看護師たちの献身的な看病で助けられたと述懐している。いままでもなく、日本の看護師たちは低く定められた賃金のままで、体を張って最前線に戦っていることを忘れてはならない。



緊急事態宣言を受け人影も疎らな大阪市内の観光地

第四に、現在の経済のグローバル化の陰で戦争のような生活を送ってきた人々にとって、新型コロナウイルスの飛沫感染の危機がどのような意味を持つのか考へること。危機は、生活がいとも危機にある人々にとつては日常である、というあたり前の事実を私たちが忘れがちである。原発事故によって放射性物質にさらされ、いまだに避難中の人々にとつて、病気になるリスクは、新型コロナウイルスよりも低いだろうか。ホームレスが病気を患っている可能性は、新型コロナウイルスに感染する可能性よりも低いだろうか。派遣労働者として働いているシングルマザーにとつて、体を崩して子どもに負担をかける怖さは、新型コロナウイルスの怖さよりも小さいだろうか。学校に馴染めない子どもたちが学校によって傷つリスクは、こ

可能な連立を望まれる。

第四に、現在の経済のグローバル化の陰で戦争のような生活を送ってきた人々にとつて、新型コロナウイルスの飛沫感染の危機がどのような意味を持つのか考へること。危機は、生活がいとも危機にある人々にとつては日常である、というあたり前の事実を私たちが忘れがちである。原発事故によって放射性物質にさらされ、いまだに避難中の人々にとつて、病気になるリスクは、新型コロナウイルスよりも低いだろうか。ホームレスが病気を患っている可能性は、新型コロナウイルスに感染する可能性よりも低いだろうか。派遣労働者として働いているシングルマザーにとつて、体を崩して子どもに負担をかける怖さは、新型コロナウイルスの怖さよりも小さいだろうか。学校に馴染めない子どもたちが学校によって傷つリスクは、こ

女神クリオに試される日本

いかに野蠻に打ち勝つか

日本は各国と同様に、歴史の女神クリオによって試されている。果たして日本はパンデミック後も生き残るに値する国家なのかどうか。死者数の少なさも、最終的な判断の材料から外れる。試されるのは、すでに述べてきたように、いかに、人間の価値の切り捨てに抗うかである。いかに、感情に曇らされて、ラストレインを「魔法」狩りや「弱いもの」への攻撃で晴らすような野蠻に打ち勝つか、である。(この危機の時代だからこそ、危機の観客性が



京都大学で「比叡の光」と共に撮影・取材

第四に、政府が戦争遂行のために世界への情報提供を制限し、マスコミもそれにしたがったこと。これは、スハニッシュ・インフルエンザの爆発的流行を促進した大きな原因である。

第五に、スハニッシュ・インフルエンザは、第一次世界大戦の死者数よりも多くの死者を出したにもかかわらず、後年の歴史教科書からも人びとの記憶からも消えてしまったこと。それゆえに、歴史的な検証が十分にならなかったこと。

第六に、政府も民衆も、しばしば感情によって理性が曇らされること。

現在も、疑心暗鬼が人びとの心底に沈む差別意識を自覚めさせている。これまで世界が差別とどこん戦ってきたならば、こんなときに「コロナウイルスをばら撒く中国人はお断り」というような発言や欧米でのアジア人差別を減少させることができたろう。

第七に、アメリカでは清掃業者がインフルエンザにかり、ゴミ収集車が動けなくなり、町中にゴミがたまったこと。もちろん、それは都市の衛生状況を悪化させること。医療崩壊ももちろん避けたいが、清掃崩壊も危険であること。

第八に、為政者や官僚にも感染者が増え、行政手続きが滞る可能性があること。たとえば、当時のアメリカの大統領ウッドロウ・ウィルソンも彼が英伊リと四国対談の最中(三九、四度の発熱で倒れ、病院に入院している間、会議の流れが大きく変わり、ドイツへの懲罰的なヴェルサイユ条約の方向性が決まってしまう)。

の子たちに新型コロナウイルスよりも低いだろうか。なにより、新型コロナウイルスがこつこつと弱い立場に追いやられていく人々にこそ、甚大かつ長期的な影響を及ぼすという予測は、現代史を振り返ると十分にありうる。

第五に、危機の時代に立場にあるにも関わらず、情報を抑制したり、情報を的確に伝えなかったりする人々に異議申し立てを求めないこと。インターネット上の新聞記事は、個人の生命に関わる重要な記事にもかかわらず、有料が多い。情報の制限が一人の救えたかもしれない命を消すこともあるのだ。せめて新型コロナウイルスに関する記事だけでも無料で配信するのが、メディアの社会的責任である。



9月20日、27日放送予定の「比叡の光」では、パンデミックを生きる指針の根底にある「慈愛の精神」をKBS平野アナが藤原氏へのインタビューから引き出す。

くる人びとのためにどれほどの対策を練ることができか、という方向の試金石にはならぬ補足があつてもよいだろう。危機の時代は、これまで隠されていた人間の卑しさや日常の危機を顕在化させる。危機以前からコロナウイルスにも匹敵する脅威に、もう嫌になつてしまってきた人びとのために、どれほど力を尽くすか。皆が石を投げる人間に考えもせず、精になつて石を投げる卑しさを、こよまで抑えることができないか。これがクリオの判断材料にほかならない。「いつかの切り捨てと責任の押し付けでウイルスを制圧したと善る国家は、パンデミック後の世界では、もはや恥ずかしきあまり崩れ落ちていくだろう。」